

近鉄奈良駅のほど近く、小さなホテルが修学旅行二日目の終着地だった。京都では、梅雨のしめりけを陽光が立ち上がらせてひどいものだったが、ここ奈良はまだましだ。四階の窓を開ければ、それなりに涼しい風が入る。夜は明るく、東京みたいに下卑た喧騒がないためずっと静かだ。景色も悪くない。理想とまでは言わないけれど、東京を思い出さなくて済むだけ、ツインルームでも我慢してやろうという気にはなる。

生徒たちは部屋に押し込められ、一日の日記を書かされている。俺はとっくに書き終えていて、今は風呂の時間が来るのを待っていた。

「片山、今何時？」

肩越しに振り向くと、三条大翔がベッドに寝転んで頭だけこちらに向けている。中一からずっと同じクラスにいたが、今の今まで話した記憶はない。にもかかわらず、班が一緒になったというだけで、この馴れ馴れしさだ。人の距離感というものが欠落していると思えない。

戸惑ったが、ポケットからスマホを取り出して答える。「七時十分」

「えー！ あと二十分もこうしていかないといけないのかよ」 ひっくり返ったカメのようにじたばたしている。話したことはなくとも、教室の隅で観察するだけで充分だった。三条とは、そういう恥知らずな男なのだ。

「どうでもいいのにさ。オウバクシュウとか、カイパンとか」

そう言つて、今日巡った萬福寺のパンフレットを宙に放った。京都駅から奈良線一本で行けて、観光客も少ない穴場。そういう建前で、俺が提案した行き先だった。

三条の言い分には同意する。寺そのものに興味があつたわけじゃない。俺が萬福寺を選んだのは、望月彩音がそこに行きたいと話していたのを耳にしたから。それだけだ。

望月彩音。芸名は春宮彩音。中学生でありながら、大人びたスタイルに無垢なキャラクター、グループ最年少でセンターを張るアイドルで、学校では「真面目で明るい子」として優等生扱いされている。テストは壊滅的でも、彼女の真剣さがみんなに理解されているのだ。

俺は彼女のデビュー時から目をつけていた。でも、クラスでは一度も話しかけたことがないし、知ってるそぶりも見せない。そんなものは、自分の弱みを晒すだけだからだ。

ちなみに望月と三条は同じ幼稚園に通っていた、つまりところ幼馴染だ。今は疎遠だと聞いているが、子どもっぽい三条なら距離を取られて当然だろう。

「片山、ジュース買いに行こうぜ」

三条はボディバッグを手にもち上げる。食い下がられても面倒だと思い、俺は三条の後に続いた。

ホテルの廊下は凹型に伸びていて、東端が通常階段、西端は非常階段、中央にエレベーターがある。俺たちの部屋は、そのエレベーターホールの向かいにあった。

扉を開けた瞬間、エレベーター脇のソファに誰かが腰掛けているのが見えた。佐川先生だ。スマホから顔を上げたその目が、すぐに眉間にしわを寄せる。

「こら、何出てきてんだ」

ドスの利いた声が廊下に響いた。元警官という経歴に裏打ちされた、柄の悪い言い方だ。それでいて授業は妙に丁寧で、生徒には（あの望月からも）人気があるらしい。俺は好きじ

やない。彼の「ギャップ」とやらが評価されているらしいが、プラスとマイナスを足してゼロになったような人間をどうして好きになれる。

「いや、日記書き終わって暇だなんて」

三条は慌てて取り繕った。佐川先生に言い訳は通じない、生徒の考えなどたいてい見透かしてくる。三条の場合も例外ではなく、佐川先生は呆れた表情を浮かべた。

「班行動は面白かったか」先生が聞く。俺たちは黙って頷いた。

「そうか。修学旅行はどこも同じような場所を巡るから、お前らみたいなのは珍しい。萬福寺なんて俺も行ったことない」

緊張感をそのままにしばらく談笑する。先生は「もう行くから夜中に歩くんじやないぞ」とだけ言い残し、東の廊下へと消えていった。

先生の背中が見えなくなった途端、

「あぶねえ。じゃあ行こうぜ」

三条はまったく懲りた様子もなく言う。さすがに俺も呆れて、三条ひとりで行かせることにした。

自動販売機は六階にあるのだが、その下の五階で教師たちが泊まっている。運が悪いと、いや確実に見つかって叱られるだろう。ちなみに当然というべきか、俺達のいる四階が男子、三階が女子という具合に、フロアは性別で分けられている。

三条を見送り、ソファに座り込んだ。太ももとふくらはぎに張りついていた疲労が、じわじわと剥がれていく感覚。しばらく目を閉じて、今日一日の出来事を思い返した。

望月彩音の班が萬福寺に來ないと知ったのは、現地に着いてからだだった。伏見稲荷に予定変更したらしい。そんなものは、俺が班にいたら絶対に却下していた。彼女は二年前、伏見稲荷を訪ねる朝のニュースに出演している。ただのクラスメイトじゃ知らないのも無理ないが、彼女の望みを曲げるとはどういうことだ。

ゴウン、と背後で音が唸った。エレベーターだ。表示板に「3」の数字が灯り、電車のドアのように半分だけ中が見える堅穴の暗がりケーブルが滑る。静まり返った廊下に、駆動音は妙に大きく響いた。

ぱっと明るくなってエレベーターは四階を通過する。俺は反射的に、意味もなく眺めていた。

まさか、箱の中に望月彩音が乗っているとは思わずに。

思わずソファから跳ね起きた。見間違いかとも思われたが、あれは間違いなく望月彩音だと確信する。誰にも見せない、憂いに満ちた表情が網膜に焼き付いた。

なぜ、こんな時間に。どこへ行くつもりだ。表示板に釘づけになる。6、7、8、R……エレベーターは屋上で止まった。数秒して再び動き出し、今度は下りてくる。彼女に気づかれるのを恐れ、ソファに座り直して横目ですれ違いのを待った。

だが、箱の中に彼女の姿は見えなかった。

エレベーターはそのまま一階に止まった。

屋上に、彼女はいる。そう思った瞬間、脳裏に奇妙な想像が浮かんた。

誰かと密会しているのではないか。まさかそんな。そうであってほしくないという気持ちだが、逆に不安を強くしていく。根拠もないのに、なぜか望月が男の胸に抱かれる姿がイメージできた。

親指の爪をカクカクと噛む。不安になるとこれをやるのだが、人前ではみつともないので我慢するようにしている。だからゆっくり近づいてくる足音を耳して、すぐに指を口から離れた。

「へっへっへっ、セーフ！」

三条だ。ボディバッグを抱えたまま、当然のように隣に座る。

「なに買ったと思う？」

もったいぶって言う。俺はそれどころじゃない。

「コーラとか」

「ブー！ 残念。正解はエナドリでしたー」と大して冷えてもなさそうな青と銀色の缶を取り出した。

ムカつく。だが、この修学旅行で三条と話せるのは思わぬラッキーかも知れない。

咳払いして、切り出す。

「望月ってさ、彼氏とかいる？」

「え、彩音？ なんで？」

彩音。その呼び方に「俺のほうか望月のことを知っているぞ」とでもいうような意図が感じられ、苛立ちが走る。俺はエレベーターの件を簡潔に伝えた。

「彼氏か、どうだろうな。彩音ぐらいになるとすぐに噂が立つだろうし、噂を聞かないってことはないんじゃないか」

「そうか」

にやけそうになるのを、歯を食いしばってこらえる。

その時、ホールの東側から「ガチャ」と開く音が聞こえる。

「ん、誰だろうな」三条が寄っていて廊下を覗く。

「藤代だ。あいつも自販機かな」

俺のにやけはすぐに引っ込んだ。

藤代颯太。眉目秀丽、成績も悪くない。変なところがお利口さんな奴で、クラスで唯一「修学旅行にスマホを持ってきてはいけない」言いつけを守っている。おかげで昨日の班行動では、手持ち無沙汰だと嘆いていた。

けれどかわいそうなどとは思わない。中身は腐ったようなやつで、体目当てで何人も手を出し、トラブルを起こしている。教師どもにマークされているのは有名な話だ。

まさか弱みを握られたりなんかして——藤代ならやりかねない。セーラー服をひん剥かれ、涙目の望月が目に見えぬ。

いや待て、そんなはずないだろう。さすがに妄想が先走りすぎた。爪を噛みそうになった指を握りしめる。

そこへ、突然エナジードリンクの缶が吹いた。俺のズボンにも思いきり飛び散る。三条は慌てて缶を咥え、あふれ出す液体をなんとか止めようとするが、半分以上はぼたぼたとリウムの床に垂れてしまった。

「なにしてんだよ」

三条は慌ててポケットティッシュを取り出したが、到底足りない。

「悪い、トイレットペーパー取ってきて」

俺をパシリに使うのかとムツとしたが、頭を冷やすにはちょうどいい。俺は立ち上がった。

トイレは西の廊下を突き当たりまで行ったところにある。小便器と個室がひとつずつだけの簡素なつくりだ。

中に入ると、鼻につく酸っぱい臭いと、誰かの抑えた話し声。個室は使われていた。

「ごめん、紙、こっちに投げてくれない」

声はピクリと反応し、わずかに小さくなる。

「は、はい……その声、片山くん？」

誰かと思えば榊原智徳だ。クラスでも特に目立たない、いかにも根暗という見た目のメガネ男子。やけに滑舌のいい声でわかる。

榊原は同じ班の一員で、問題児である藤代と同室に押し込められている。たまらず逃げ出してきたといったところだろう。

「ちよっと待ってて、すぐ渡すから。あ、いや、こっちの話」

電話でもしてるのか、俺宛じゃない言葉が混じる。

「いち、に、はいっ」

合図とともに、トイレットペーパーのロールがくるくると宙を舞う。

「ありがと」

紙を受け取ると、俺はそのままトイレを出た。いつも暗い榊原が妙に慌ただしいのが気になった。

ホールに戻ると、藤代と三条が佐川先生の前に正座させられていた。言い逃れでもしたのか、先生の顔は真つ赤で、ふたりとも神妙な面持ちをしている。

全く非がないし堂々としていればよいのだが、あえて三条のそばにしゃがみ、こぼれたエナドリをせっせと拭った。手を動かしながら藤代を盗み見る。

ゆるくウェーブした前髪が片目にかかり、耳にはいくつもピアスの痕。軽薄な風貌に、軽薄な中身が滲んでいた。

こんな奴が望月の相手だったら。冗談じゃない。想像するだけで、胃のあたりが嫌なふうにぞわぞわした。

再びエレベーターが動き出す。一階からほどなく俺の眼前を通り抜ける。またしても乗っている人影はなかった。

また、だ。さっきと同じ。

なぜか胸がざわつく。エレベーターは最上階まで行くと、とんぼ返りで下りて戻って来る。

「夜景でも見に行つたんだ」

自分でつぶやいて、自分でそれを否定したくなる。

密会なんてしていない。彼氏もない。ただの偶然。偶然に決まってる。

すれ違いざま、エレベーターの奥に見えた望月彩音は、目を真つ赤に泣き腫らしていた。

一瞬だけだが、確かに。俺は動揺を隠せず、隣の三条も言葉はなく、固まっている。

望月は、俺の知らない「なにか」を抱えている。そう確信せざるを得なかった。

その夜、俺も三条も寝付けなかった。言うまでもない。望月彩音のことだ。

泣き腫らした彼女を目撃し、なにもなかったと結論付けられるほど愚鈍ではない。彼女はあの夜、屋上で誰かと密会していたに違いないのだ。

しんとした暗がりの部屋で、三条が声を落として言う。

「片山がトイレに行ってる間さ、佐川先生と藤代が来たけど、エレベーターは動かなかったぜ」

俺がエレベーターホールを離れた時間はせいぜい一分あまり。その間にエレベーターで屋上に行って戻って来ることは不可能だ。信じてよいだろう。

「そっか」

「なんだよ、薄い反応だな。そんなに彩音のことが気になるなら、直接確認すればいいじゃん」

確認を取るなど、自分の好意を白状するようなものだ。俺に弱みを晒す趣味はない。

ところで、三条は隠しているつもりだろうが、彼も望月を憎からず思っているようだ。でなければ、疎遠になった幼馴染の密会疑惑なんて興味ないはず。

だから、あえて三条にこの件を話すのだ。情報を引き出すために三条を利用する。俺はあくまでも、傍観者の位置から真実を見極める。

「なんなら俺が彩音に聞いても……いや、教えてくれるわけないか」

「そうだよ。アイドルは恋愛禁止なんだから」

「うーん、なのかなあ」

望月が所属するグループは、恋愛禁止を公言している。それが売りだったのだ。もし不義理を働いたとして、それを隠そうとするはず。真面目な望月彩音なら。

三条は続ける。

「いやさ、彩音って今は活動休止中だろ確か。だから修学旅行に来れたつてのもあると思うし、ほら、活動してない間は恋愛オーケーだったりしないか？」

やけに軽い口ぶりだったが、内容は無視できなかった。

三条の言う通り、望月の所属するグループはこの春から活動を休止している。公式は口を閉ざしているが、理由は望月だろう。彼女が自室に仕掛けられていた盗撮用の小型カメラを発見し、その直後に活動が止まったことを、俺は知っている。

だとしても、休止ということは再開する前提だ。その理屈は通らない。

「じゃあ片山はなんだろうと思う」

拗ねたような声できいてくる。認めたくないが、彼氏と会っていた説を覆す材料はない。

「……弱みを握られている、とか」

三条は鼻で笑った。

「それはなくね？ 彩音ってああ見えて、やられたらやり返すタイプなんだよ。昔、俺の顔にアイスぶつけたやつ、泣くまで追いかけてたし」

今は疎遠なくせに、幼馴染っただけで、全部わかったふうに振る舞うな。黙って布団をかぶった。

彼女が誰となにをしていたのか。それを知るまで、俺の心は休まらない。

修学旅行三日目は、奈良市内を貸切バスで巡る。帰りの新幹線の時間が決まっており、今日に限っては自由行動はない。寺も仏像も興味のない俺には、つまらない一日になるところだったが、幸か不幸か望月の一件で退屈は吹き飛んでしまった。

興福寺に向かうバスの中で、俺は先頭列から後方を見やる。

最後列。比較的顔立ちの整ったやつらが集まるエリアの中心に、望月はいた。

まるで王の玉座だ。お誕生日席のように最奥からバス中を見渡せるし、左右には取り巻きが控えている。こういう自由席のときこそ、クラスのヒエラルキーは赤裸々に姿を現す。ヒエラルキーの低い者は、彼女に近づくことさえ叶わないのだ。

「この辺、ライブとかで来たことあるでしょ？」取り巻きの一人が言う。

「えー、わかんないなあ。百年会館の周りしか」

望月はぺかっと花が咲いたように笑った。無垢で、無防備で、ドラマの一場面を演じるようだった。

そこから二列前。藤代颯太は窓際のシートにいる。度々監視の目を光らせているが、未だ望月にちよつかいを出す素振りはない。だが油断は禁物だ。一瞬の接触が、彼女との関係を浮き彫りにするに違いない。俺はその一瞬を見逃すまいと一層警戒心を高めた。

バスを下りると、俺たちはアリのように一列で境内を進んだ。頭上に木陰はほとんどない。キャップを目深にかぶり、じわりと滲む汗をこらえながら、俺は望月の背を目で追った。

東金堂に入ってようやく一息つくことができた。すーっと木材と線香の香りが鼻をくすぐる。見上げれば、擦れたような金色の像が鎮座している。光背の部分だけ発色が美しく、そのあべこべさがおかしく映った。

遠くで佐川先生が言う。「真ん中が薬師如来、右が日光菩薩、左が月光菩薩だ」

名前だけ言われても、ありがたみは湧いてこない。けれど、いかにも偉そうな人が脇侍を携えた姿は、望月の影が重なるような気がした。

「片山、ちょっと」

三条がポニーテールの女子を引き連れて現れた。見下ろしてくる双眸はウズウズと好奇心で満ちている。

「……なに」

「宇佐美が知ってるんだってさ」

なにを、とはきかなかった。十中八九、望月のことだ。

宇佐美芹の印象は、その知れない女だ。普段は仲の良い女子グループと群れていて、成績は普通、所属するソフトテニス部でも目立たず、総じて何に本気なのか読めない。

そんな彼女は、なぜか俺たち男子の班に一人だけ加わっている。片山・三条・藤代・榊原。そして宇佐美。男ばかりの中に、たった一人。

「大きな声じゃ話せないし」と宇佐美は俺たちを仏像を見る集団から引き離す。周囲の視線を気にするとやおらに、

「彩音の彼氏が知りたいんでしょ、教えてあげる」

やはり付き合っている男いるのか。たらっと汗が脇を伝う。

「……ほ、本人から聞いたわけ？」

俺は恐る恐るきく。緊張のせいかな、喉が詰まって声が裏返ってしまった。

「ううん。でも『彼氏か？』って聞かれた彩音がまんざらそうだったから、多分間違いない」
なんだそりゃ。確信ぶった割に、憶測と思ひ込みばかり。俺は落胆の色を隠しつつ「それで、誰なの」と先を促した。

「藤代だよ、藤代」

宇佐美は誇らしげに語りだした。

彼女の話によると、昨夜七時からの日記を書く時間、望月と同室の取り巻きその一がSNS上でライブ配信を行っていた。宇佐美はルームメイトが通話しているところを横から見ていたらしい。

配信開始から十五分ほど経ったころ、望月のスマホが鳴った。画面を確認すると、彼女はさっと立ち上がり、無言で部屋を出ていった。

その去り際、取り巻きが「彼氏のことか？」と茶化すと、望月は「うーん」と曖昧に笑って、否定も肯定もしなかったという。

「で、そのあと？」

三条が前のめりになる。彼は最後まで話を聞いて連れてきたわけではないようだ。

「知らないよ。私、そのへんで見るのやめたし」

肩をすくめる宇佐美。三条はムッと顔をしかめた。

「じゃあその放送、見せてくれよ」

「え、無理だよ」宇佐美は、ないない、と顔の前で手を大げさに扇いで見せる。

「私、SNSとかやらない主義なんだよね。チャットさえできれば十分っていうか、写真を見せびらかす意味がわかんないし」

主張するが証拠は見せられない、ときた。信じるには論拠が弱い。

俺は冷やややかに彼女に向き直る。

「……なんで藤代なんだよ」

俺が口を挟むと、宇佐美はふいっと横を向いた。

「他にいる？ 藤代以外に、彩音を呼び出せるような男子」

あまりに乱暴な結論だった。だが一方で、否定しきれない不安も、喉の奥に引っかかっていた。

望月のまわりにいる男子はいつでもこいつも、ブルーライトに群がる虫のように、うるさく周囲を飛び回るだけだ。だが藤代は彼らに比べて積極的。狙った女子には脇目も振らずにアタックする。望月を呼び出せるような男子は藤代だけ、という部分には同意する。

それに、実際問題、望月が屋上にいたと見られる時間、藤代は階段から抜け出している。可能性でいえば最も高いだろう。

俺は試しに、藤代が望月と密会する過程を、脳内でシミュレーションしてみた。

午後七時十五分、藤代は望月にメッセージを送る。「今から屋上で会おうぜ」こんな感じの文言だろうか。すぐに望月はエレベーターに乗って屋上へ向かう。

数分を置き、藤代は部屋を出る。そのうしろ姿を三条が目撃。

藤代は四階から屋上までを通常階段で駆け上がる。五階には佐川先生がいるが、この時点では気づかれない。

藤代が屋上に到着、蜜月を重ねる。

そして、来た道を引き返す。階段を駆け下りて四階へ。ここで佐川先生に見つかり、エレベーターホールに連行される。

最後に望月がエレベーターで三階に帰る。

こんなところだろうか。

宇佐美は得意顔で続ける。

「男子は知らないと思うけど、彩音ってかなり遊んでるのよ。カバンにゴムが入ってるのを見たって噂もあるんだから」

すると宇佐美への信頼を失うとともに、段々とこの女の魂胆がわかってきた。

こいつはただ、望月を貶めたいのだ。仲良くもない、けれど遠くからでもキラキラ輝いて、人気者な彼女を。そういう醜い嫉妬心が、ニヤケ顔のシワのひとつひとつから飛沫を上げて流れ出るのを肌で感じた。

「そうなんだ、知らなかったよ」

素知らぬ顔でそう返すと、俺は彼女から一步、距離を取った。三条はなにか言いたそうだったが、この程度の女に付き合ってやる義理もない。

「まさか信じてないよな」

宇佐美の背中を見送った直後、三条が眉をひそめて詰め寄った。

俺は小さくかぶりを振った。三条の顔からふっと緊張が抜ける。

「だよな。結構いるんだよ、ああいうさ。彩音が目立つからって、勝手に悪く言うやつ。根も葉もないことで」

三条は鼻を鳴らした。どこか苦い記憶でもあるのだろう。

普段ならその訳知り顔に苛立ちを覚えるところだが、今だけはちがった。自分と同じように、望月を悪く言う輩に憤りを感じていたのだと思うと、親近感のようなものが胸に灯った。「でもどうする？　こんなこと言いたくないけど、相手が藤代じゃないって否定できないだろ」

三条は不安そうに俺を見た。信じたいのに、心のどこかで揺れている。そんな感情が伝わってきた。

「……望月は、藤代と付き合ってない、と思う」ぼそつと言う。

「なんでそう言えるんだよ」

生徒たちの列が動き出した。俺と三条は列の後方を肩を並べて歩く。

国宝館は駐車場をはさんで向かいにある。寺の佇まいに不似合いな駐車場のアスファルトは、そこだけ午前のカッと照る太陽を浴びて、熱気を放っていた。

「藤代はスマホを持ってきてない」

そう、藤代颯太はチャラチャラした見た目に反して、お行儀よく修学旅行のルールを守った。

「じゃあ、スマホを借りたとか？　同室のやつとかに」三条が即座に返す。

藤代の同室の生徒といえば、榊原だ。しかし、彼から借りることはできなかったろう。

「……榊原はあるとき、トイレで電話してた。トイレットパーを取りに行った時」

「あ、そうなのか」

「望月が連絡を受けた七時十五分の時点で、榊原のスマホは手元にあった。藤代が使えるタイミングはない」

俺たちは七時十分にホールに出た。榊原がトイレに向かうところを見てないということは、俺たちより先に行っていたことになる。望月が連絡を受け取ったのが七時十五分ごろだったというから、藤代が榊原のスマホを借りる仮説は成り立たない。

三条はふーん、と唇を尖らせる。

「じゃあ、他のやつ。別の班のやつスマホでも借りたんじゃね？」

「ないよ」俺は言い切った。

俺と三条が部屋を出た時、佐川先生は監視の目を光らせていた。問題児の藤代が他の部屋に行こうとすれば、真つ先に佐川先生が捕まえていただろう。

「佐川先生がいたか。じゃあ、榊原がトイレに行けたのはどうして」

『用を足す』って言えば疑われない。でも、藤代だったら疑われる。日頃の行いの悪いら」

淡々と藤代説の反証を語るにつれ、三条の口端がほころんでいくことに気づいた。

説明し終えたところには「やつぱりな、そんな気がしてたんだよ」と、どこか照れ隠しのよな笑いを漏らす。その笑みは愛想ではなく、心を許したような安心感が含まれていた。

そんなに簡単に人を信じて、こいつは損をしないだろうか。

俺は顔を伏せて、次に何をすべきかを考えた。

藤代は密会相手ではない、というのは見聞きした情報を当てはめただけで、憶測の域を出ない。

次に必要なのは、もっと具体的に確実な、証拠だった。

③

ホテル蜜蝋の月。近鉄奈良駅から徒歩五分。客室は三〜八階、タイプはシングル・ツイン・ダブル。

レストラン・カフェテリア・WIFI完備。自動販売機は一・六・八階、エレベーター前にございます。

※一階の自動販売機はカフェテリア内にあり、営業終了時刻午後七時をもってご利用いただけません。

※非常階段はスタッフが使用します。お客様はご利用いただけません（非常時に開放）。フロアマップはこちら。

水色の「こちら」をタップした。昨日宿泊したホテルの見取り図が表示される。どの階になにがあったのかを眺め、俺は無心で指を繰った。

俺と三条の調査は、明らかに停滞していた。

帰りの新幹線は実におだやかに走っていた。生徒たちは二泊三日のうちに元氣を使い果たし、貸し切った車両で寝息を立てている。もちろん全員が全員というわけではないが、時間が立つにつれて、ひとりまたひとりと脱落していく。名古屋を過ぎたあたりで、車両はす

っかり眠気と倦怠感に支配された。

俺と三条は並んでスマホを睨む。

宇佐美の話が本当なら、放送中に望月は彼氏を匂わせる言動をした。SNSで放送した映像は、放送終了後にアーカイブとして保存され、フォロー状態ならあとで見直すことができる。放送のアーカイブを確認するため、クラスメイトの相互フォローを数珠つなぎに追いかけていった。執念にも似た作業だった。

やがて、昨夜の放送を行ったアカウント——望月の取り巻きのひとり——を発見した。フォローは軽く四桁に届く勢いで、投稿数も異様に多い。カラオケ、海、運動会。どの写真にも彼女が中心に据えられ、実物より目を大きく、肌もきれいに加工されている。頼まれたわけでもないのにせつせと写真を撮って公開する様は、承認欲求という言葉の見本のようにだった。

ただ、その熱量のおかげで、俺たちはアカウントを見つけることができた。
なのに、アーカイブがない。

拍子抜けだった。

ページを何度更新しても、見つからない。過去に配信された形跡さえ、どこにもない。まるで最初からそんな配信は存在しなかったかのようにだった。

焦りにも似た感覚が胸をよぎる。じゃあ、宇佐美の話は嘘だったのか。

「もしかして、複アカか？」

三条がぼつりとつぶやいた。

複アカ、すなわち複数のアカウントを使い分ける行為。もし放送用のアカウントを別に持っていたとすれば、俺たちが辿り着いたのは、見せかけの顔に過ぎないということになる。

「だったら他のアカウントも調べればいい」

誰だって、そう言いたくなるはずだ。

実のところ、放送を行ったと思われる別アカウントは、ことのほか簡単に見つかった。

望月のアカウントを起点に、そこから取り巻きらしき連中を洗い出し、候補を絞ったのだ。けれど、そこで手が止まった。

理由は単純。鍵がかかっていたのだ。

複数のアカウントを使い分けるやつは、大抵、目的によって「公」と「私」を分ける。

派手にリア充アピールする公開アカと、限られた友人しか見られない鍵アカ。

問題の放送があったのは、後者——つまり“見られない場所”だった。

鍵アカウントを見るには、フォローリクエストを送って、承認されるしかない。けれど俺も三条も、望月の取り巻きとは接点が薄かった。そんなやつから急にフォローが来たら、警戒されてしまう。当然リクエストが承認されるはずもなかった。

行き止まりだ。目の前に壁がある。高すぎて手が届かない、超えられない。

そんなもどかしさだけが、残された。

捜査を阻まれた俺は、無心で関わりのありそうな情報を探している。

望月のSNS、クラスメイトの投稿、ホテルのホームページ。いずれも、表向きの情報しかない。誰もが見ていいと思って書いた、つまらない記録。そんな中に、密会の痕跡なんてあるはずがない。

「リクエスト、承認されねえな」

三条がぼそりと呟く。まぶたを擦りながら、スマホをのぞき込む顔は、どこか諦めの色を帯びていた。

俺も眠い。でも、それを見せるわけにはいかない。気を緩めたら、こいつが本当に諦めそうな気がした。

「なあ、片山ってアーカイブを見せてくれそうな女友達いねーの？」

「いるわけないでしょ」

「だよな」

三条は腕を組んで背もたれに沈む。口ぶりからして、彼もいないのだろう。三条は笑うでもなく、悔しがるでもなく、ただ静かに共感してくれた。

たしかに正攻法で見るとは叶わないが、抜け道は存在する。

アカウントをなりすますのだ。

取り巻きと仲が良い人物のアカウントであると誤認させ、フォロワーリクエストを承認してもらう。

たとえバレたとしても、せいぜい悪質なイタズラ扱い。俺が誰かまでは辿れない。

もちろん、グレーな方法だとは分かっている。危ない橋は、可能な限り渡らない。短い人生で学んだ教訓だ。

正直、俺は葛藤している。

本当にもし、なにかの拍子で、俺の行動がバレたら、彼女になんとされるだろう。俺はこれまでどおり生活できる自信がない。

だが今回の場合、リスクと成果を天秤にかければ、やる価値は十分あるように思える。

俺は三条から見えないように角度をつけ、スマホの写真アプリを開く。望月の写真フォルダーにある渾身の一枚。俺が彼女の初ライブで撮影したものだ。

白い肌、うねる髪、輝く瞳、躍動する体躯。そのどれもが、この世のものとは思えないほど美しい。

やはりそうだ。俺は、彼女のことを知りたい。

心を決めた俺はさつそく新しいアカウントを開設した。

なりすます相手は宇佐美。近すぎず、遠すぎない。取り巻きの目には、ちょうど信じられそうな距離感に映るはずだ。

それに、宇佐美はSNSをやっていない。新しく始めた謳えば、フォロワー数がゼロの出来たてアカウントでも信じてもらえる。

アイコンには修学旅行の画像を用いる。そもそも彼女の写真など持っていないため、学校に提出するために撮影した写真を使うことに決めた。班のグループチャットからダウンロードし、宇佐美の顔の部分だけを丸くトリミングする。萬福寺の総門が映り込んでいるが、違和感を感じるほどではなかった。

あつという間に作業は終わった。俺はフォロワーのボタンをタップしようとした。

「片山、なにやってんの」

三条がぼけーとした顔でく。俺はとつさにホーム画面に戻り、あたりを見回す。皆、寝るかスマホを見るかしていて、こちらの話聞く心配はなかった。

俺はそつと耳をうつ。

「なりすましのアカウントを作ってる」

「お前本気で言ってる？」

「……当たり前じゃん。今フォロリクエストを送る」

彼は耳を疑い、真剣な表情を露わにする。一瞬、何が引っかかったのか分からなかった。逡巡の後、彼がこの方法を嫌がっていることに気づいた。

「なんでそんなに嫌がる」つい、口にしてしまう。

「なりすましてさ、要するに騙すってことだろ。そういうの、さすがにマズイだろ」たしなめるように言ってくる。トゲのない言葉が、重みを増してのしかかってきた。

「それってさ、オレオレ詐欺と変わらないっていうか。損させてないとしても」

詐欺？ それは違う。俺たちはただ、真実に近づこうとしてるだけではないか。

「バレなきゃいいとか、そういう問題じゃなくてさ。そこまでしなくても、いいだろ？」そうだろうか。

今や誰だって、ちょっとした情報を探るくらいなら平気でやってる。たかがSNS。アカウントを作った時点で、誰にだって見られる覚悟くらいあるはずだろ。

沈黙。走行音だけがふたりの間に響いた。

見つめるうちに、彼は顔を伏せた。迷っているというより、俺と目を合わせたくないように見えた。

「こういうのってさ、法律とかに引っかかりたりするのかな」

三条はぼそつと食い下がる。

「……だったら何だよ」

俺は声のトーンを落とす。これは会話ではない。三条が自分の正義感で独り相撲をとっているだけだ。

「だからさ。そこまでして、やる意味あるか」

三条は肩を落としたまま言う。「あいつが相手なんじゃないかって、もう見当はついてるんだ」

ピクリと耳が動く。三条も三条なりに真相に迫っていたのか。

「誰なんだ」

「それを言う前にこれを見せてくれ」

三条が見せたのはホテルのフロアマップだった。

屋上階の簡易的な見取り図が表示されている。エレベーターホールを囲うようにガラス戸が設けられ、広々とした展望テラスが広がる。左上に小さく非常階段が書き込まれ、他の階よりシンプルだ。

「次にこれ」

ページを下にスクロールする。八階は俺たちが泊まった四階と異なり、エレベーター脇のソファがあつたスペースに、自動販売機が設置されている。一部屋あたりの広さも広く取られている。あとの作りは同じだ。凹型に伸びる廊下の先に、東は通常階段、西は非常階段がある。

地図を目に焼き付けるようにじっくりと見る。「それで？」

「気づかないか。東の階段は八階で終わってる。通常階段じゃ屋上に出られないんだよ」

そういうことか。屋上へ通じるエレベーターを使用したのは、望月ただひとり。といっても、俺がトイレに行っていた一分で、誰もエレベーターを使っていないという、三条の供述を前提にしているわけだが。

だから、密会相手はエレベーター以外で屋上へ上がる必要がある。三条の言わんとすることは、つまり――

「通常階段を使った人は、密会相手じゃない」

「そう。密会相手は、彩音が屋上にいた間、部屋を出ていて、かつ通常階段を使っていない人しかありえねえ」

言い切ると、三条は遠くの座席に目をやった。

「俺はそう考えてる。密会相手は、榊原」

榊原は、彼に似てぱつとしない男子の集団の中で、まわりと似たように寝顔を晒していた。「……マジでそう思ってるの？」

眉をひそめて、三条に問い返す。「榊原に、それができたとは思えないけど」

「なんでだよ。トイレに行くって言って、榊原は四階の西側に向かった。そのままトイレに入らないで、非常階段で屋上に上がったんだよ。スマホで彩音を呼び出して、密会が終わったら、また非常階段を使ってトイレに戻ればいい」

三条は淡々と、だが焦るように言葉を続けた。

「非常階段は使えない」俺は割り込むように反論する。

「え？」

「非常時以外は鍵がかかっているって、ホテルのホームページに書いてあった。調べてたなら、見落とすはずないと思うけど」

三条の目からみる力が抜けていく。がっくり肩を落とし、視線を膝のあたりに落とす。あの馴れ馴れしくて元気だった彼とは、まるで別人だ。

「じゃあ逆だ」ぼそつとなにか呟く。

「逆？」

「逆だったんだよ。密会なんてなかったんだ。お前、榊原がトイレの個室で電話してたって言ったよな。あいつはずっと、望月と電話してたんだよ」

あまりに唐突で、投げやりな推理だ。自信なく震える声は、逃避するような色を含んでいる。

こいつ、本当は榊原じゃないってわかっているのではないか。

「お前、さつきから何が言いたいわけ？」口調が少しだけ強くなっていたのを、自分でも感じた。

「彩音の彼氏は榊原なんだよ。だからなりすましなんて、やる必要ないだろ？」

なりすましアカウントのことを伝えたとき、まるで俺が悪人であるかのようにたしなめてきた。

榊原説も、俺の行動を止めるための「嘘の推理」なのではないか。

「片山は、そんな事するやつじゃないだろ」

三条が静かに言った。まるで俺が間違った道から戻ることを信じているような声音だった。

どうしてそこまで俺に期待する？

「……わかった、やめるよ」

三条が、ほっとしたように息をついた。

だが、俺はその希望を踏み砕くつもりだった。

彼にとつて、最も残酷で、取り返しのつかぬ形で拒絶しようとしている。

「でも、証拠が弱いよな。俺も納得したいけど、このままだと弱すぎる」

「それは、まあ」

「そこでだ。今から榊原のスマホを見る」

つとめて無表情に、言葉は淡々と、まるで予定された作業のように。

「望月との通話履歴があれば、信じてるよ」

三条の顔から、みるみる血の気が引いた。

「やめとけよ、無理だよ。パスワードもあるし」

「……大丈夫。班行動のときに、ちよっと画面が見えた」

嘘だった。だが、彼は疑おうとはしない。疑ってそれを否定してしまえば、彼自身の「望み」が壊れてしまうのだろう。

三条は無念そうに沈黙した。最後まで抵抗していたが、俺の理屈の前に膝を折ったのだ。思い通りに人を動かした心地よさが、じわじわと満ちてゆく。

だが同時に、冷たい違和感もあった。勝ち誇ったはずの自分の胸に、かすかなざらつきが残っている。

あれは引き返せる最後の声だったかも知れない。だが、もう過ぎてしまったことだし、気にしても仕様ががない。

俺は静かにスマホを持ち直し、なりすましたアカウントでフォロリクエストを送信する。

バレずに上手くできるだろうか。指先はわずかに震えていた。

④

ブブツ、と震えたスマホの音に、反射的に目が冴えた。

時刻は零時をまわっていた。今日は金曜日。修学旅行の翌日にも関わらず、通常通り登校がある。昨日は帰宅すると普段通り、食事、風呂、明日の準備を淡々とこなしていった。だが、頭の片隅では、ずっとフォロリクエストのことがあった。気長に待てばよいのだが、望月が関わると、身体の焦燥を抑えられなくなってしまう。

ベッドで横になっても気になってしまい、輾転反側しては、時折スマホをつけてみる。そんなときだった。通知が鳴った。

やっと来たか。俺は興奮に震える指で通知をタップし、SNSアプリを開いた。

しかし、画面はチャットボックスに遷移する。通知はフォロ承認ではなかった。なんだよ、違うのか。

落胆したところにメッセージが二件。差出人は望月の取り巻きの女子だった。

「これ芹ちゃんのアカ？」

「前にSNSやらないって言ってたのに笑」

血の気が引いた。これは、確認のメッセージだ。承認の前に、本人かどうかを確かめよう

としている。

画面には、取り巻きのアイコンにオンライン状態のマークが点いている。相手も今チャットボックスを開いている。おそらく俺がメッセージを開いたことで、既読を確認したことだろう。

しまった、開かなければよかった。

だがもう遅い。返さなければ怪しまれる。返信がなければ、なりすましを疑われ、最悪アカウントはブロックされる。放送のアーカイブも削除されるかもしれない。

俺はスマホを握り直すと、宇佐美の口調を想像しながら指を動かした。

少し気だるげで、ノリは軽く、かといって馴れ馴れしすぎない距離感で。

「作ってみた笑」

「とりあえず友達フォローしておこうって感じ」

送信ボタンを押すと同時に、喉がカラカラに乾いた。

何も見透かされていないように祈りながら、俺はスマホを握ったまま息を潜める。久しぶりに心臓が破けそうなほど脈打った。

やがて、返信が届く。

「草 マジでびっくりした」

「やっぱ榊原くんの影響だったりする？」

なぜここで榊原の名が出てくるのだろう。彼女たちの間でのみ共有されている情報なら、知っているフリをするしかあるまい。

「うん そんな感じ」

俺のメッセージに取り巻きはすぐさま返信する。

「ヤバ！」

「初彼氏は大切にしなよ」

宇佐美と榊原は交際関係にあったのか。そうか、だから宇佐美は男子ばかりの班に入るのを迷いなく受け入れたのか。今なら合点がいく。となると、密会の時間に榊原が電話をかけていた相手も宇佐美か。彼女は途中で放送を見るのをやめたと言っていたし、彼氏からの着信が理由なら頷ける。

「てか、アイコン適当すぎない笑」

矢継ぎ早にメッセージが送られてくる。その言葉とほぼ同時に、別の通知が現れた。

「フォローリクエストが承認されました」

画面に浮かぶその一文を見て、思わず拳を握る。

勝った。乗り切った。

「修学旅行の写真」、「おやすみ」とメッセージを送り、取り巻きのプロフィールをタップした。

アーカイブはしっかりと残っていた。二日前の午後七時開始、放送は四十分ほどの長さだ。俺はイヤホンを耳に再生する。

映像はいきなり取り巻きの顔のアップから始まった。下からのアングルなせいか、鼻の穴が強調されて醜い印象だ。望月は画面の端のデスクに座り、黙々とペンをすべらせている。時折声をかけられるが、目線をこちらに向けるばかりで、書く方に集中していた。

美しい。まるで虚構の中の存在だ。ペンのおしりを唇にあてる仕草、前髪をかき上げる所作。つい目的を忘れてしまいそうなほど、彼女に目を奪われる。

そうしてうちに例の時刻にさしかかった。七時十五分頃、望月はスマホを確認した後、部屋を出る、と聞いている。

望月が手を止め、スマホを取り出す。何度か操作すると、スマホをデスクに置いて立ち上がった。

「あれ、彩音。どっか行くの？」

「うん、ちょっとね」

望月は曖昧にはにかむ。

「あー、もしかして彼氏のところか？」

このセリフも情報どおり。

「えー、そんなじゃないよ」

否定して入るものの、たしかにまんざらでもなさそうだ。

やはり密会はあったのだ。俺は望月が部屋に戻るまで倍速で流した。

彼女が戻ってきたのは、七時二十五分ごろ。やつれた表情で、ベッドになだれ込んだ。やはり俺の見間違いではなかった。

しばらくは取り巻きたちの質問の雨がふる。望月は一貫してはぐらかし、ついに口を割らなかった。

そして、思い立ったようにベッドから起き上がると、画面外へ消える。カメラからはちょうど死角となる手前のスペースにしゃがんだ。

「えーなにそれ、たいやき？」

「プレゼントしてもらったんだ」

「いいじゃん。カバンとストラップで色合ってるし」ふたりの会話が画面外からこだまする。それ以上は目立ったシーンもなく、映像は終了した。

概ね宇佐美の話と共通しているが、気になる点がふたつ。

まず、彼女はスマホをデスクに置いたまま部屋を出たこと。

つまり、密会中に電話を受けることは不可能だった。三条の推理、望月が榊原と通話していたという説は、ここで完全に否定される。

もうひとつは、それまで画面にも話題にもなかったストラップ。

取り巻きが知らなかったということは、その瞬間に初めて見たということの意味する。望月は、密会の際にそのストラップを受け取ったのだ。

俺はスマホを置いて、うつ伏せに沈んだ。たいやきのストラップ。それを確認する必要がある。

時計の針は、もう二時を過ぎていた。

その朝、俺はいつもより早く家を出た。たかが数十分違うだけでは街の様子は変わらない。けれど教室に入った時、ガラガラの室内を前にして、初めて変化を目の当たりにした。それまでの俺なら見ることはなかった光景。俺は自分が変わり始めたことを認識した。

いや、これは退化かもしれない。一度反省し、踏まないと誓った轍を踏もうとしている。続々とクラスメイトが登校してくる。榊原、宇佐美、藤代。三条が入ってきたときに目が

あったが、お互いにすぐ逸らしてしまい、修学旅行時のような会話が生まれることはなかった。

鈴のような話し声が聞こえてくる。声の持ち主は、大きめのセーラー服からすらっと伸びる華奢な足で教室に入ってきた。

俺はすぐに望月のカバンに注目を注ぐ。付いているはずのストラップを探した。

だが、すぐにそんな努力は無駄だとわかる。

彼女は昨日までと違うカバンで登校してきたのだ。ストラップは見当たらなかった。

荷解きを面倒がったのだろうか。違和感を抱えつつも、こういう場合は想定していた。席を立ち、その足で保健室に向かう。

養護教諭は朝一番に患者がやってきて目を丸くした。俺は頭痛や倦怠感など、思いつく症状をうそぶいて早退をお願いした。

しばらくして佐川先生が教室にやってくる。叱られるかとも思ったが、修学旅行の疲れが抜けなかったんだな、と優しい声音で俺の届け出を受け取ってくれた。皆が口々に言う、佐川先生のギャップとはこれのことか。

クラスメイトの同情的な視線を背に学校を出た。そして、来た道とは反対方向に歩を進める。一度歩いた道は勝手を知っていて、懐かしさを感じさせる。

これから俺が向かうのは、望月の自宅だ。大通りから一步入ったところにある住宅街の、一際白い壁の一軒家。

俺は外からじつと観察する。窓は締め切られ、カーテンが降ろされている。中の様子は伺えないが、それが誰もいない合図でもあった。

ポケットから鍵を取り出す。溝の上から丸くくぼみが彫られている。このタイプの鍵は仕組みが複雑で値も張るかわり、こじ開けるのが困難らしい。

この鍵を手に入れたのは、今年の四月のこと。体育の授業中、トイレに行くフリをして女子更衣室に忍び込み、彼女の制服の匂いを味わうとともに拝借した。

俺は今、再び扉を開けるのだ。そっと差し込むと、鍵は抵抗なく俺を招き入れた。

玄関に靴はなく、制服で覚えたあの匂いが漂う。どの商品を使っているのか、色々買い込んで試したときのことを思い出した。

望月の――いや、彩音の部屋は、階段を上がって、扉が三つ並んだ真ん中だ。

とすとすとん、と小気味よく階段を上がっていく。俺は興奮で息を荒げながら、ドアノブを押し込む。

彼女の部屋に入った途端、甘い香りが一層強くなる。俺はストラップを探すよりまず深呼吸した。どこよりも濃い彼女の匂いを脳に刻みつけたい。そういう一心で、すうーはあ、と長く吸い、短く吐いた。

部屋を物色していると、前回訪れた時との変化が目につく。本棚には赤本、デスク上にはスピーカーと蛍光マーカー。俺が仕掛けたカメラ付きのスマホアダプターは、さすがに取り除かれていた。

椅子を動かすと、デスクの足元に押し込まれるようにしてカバンがある。暗がりから引っぱり出して見ると、ファスナーの引き手にストラップがつけられている。

ようやく見つけた。興奮が一瞬で振り切れ、冷静さが戻って来る。ストラップは見覚えのあるものだった。たいやきと表現するには写実的というか、魚の鱗

まで刻んだ木製の細工品という印象だ。

俺はどこでこれを見たのだろう。記憶を辿ってみるが、どうにも出てきそうにない。ストラップを写真に収めると、画像検索にかける。

結果はすぐに表示された。そこではか販売されていない限定品らしかった。

これを買うことができた人物こそ密会相手だ。俺はこの確信をどう突きつけてやろうかと笑みが浮かんだ。

⑤

なりすましアカウントは、本人に知られぬうちに、着実に成果を上げていた。一度誰かにフォローされてしまえば、倍々にフォローは増えてゆく。そしてついに、望月のアカウントからもフォロワーが承認された。

自室で息をついた。震えはなかったが、心臓だけがやけに激しく跳ねている。なぜこんなことをしているのだろう、とふと思う時がある。

彼女はアイドルだ。アイドルが恋愛をしていた。ファンへの背信行為だ。

そんな月次な言葉に、自分が当てはまるだなんて到底思わない。これからすることに、これっぽちの憎悪もない。

望月が誰と付き合おうが、俺には関係ない。そう言ってきたし、思ってきたつもりだった。でも、気づけば目で追っている。彼女のことを知りたいという気持ちがとめどなく溢れていく。俺の記憶は、望月で埋まっていた。

でも、それを認めたら全部が壊れる気がしていた。好きとか、興味あるとか、そんなわかりやすい言葉を使ったら、俺の中にあるなにかが、簡単に消えてしまいそうで。

だから突き放してきた。気づかれないように、目も合わせなかった。

けれど、本当は見えてほしい。

秘密にたどり着いたこの俺を、どこかで見つけてほしいと願っていた。

パネルに指を走らせる。文字の入力にこれほど気持ちが乗るなんて、生まれて初めてだ。

「彩音、ちよつと話せないかな？」

宇佐美が送っている風に文体を寄せる。何度もなりきっているうちに慣れてしまった。

「大丈夫だよ」

「宇佐ちゃんどうしたの？」

望月から返信。取り巻きの女子と比べると、対応は幾分かそっけない。

「彩音の彼氏のことなんだけどさ」

「私、わかっちゃったんだよね」

動揺して返事が遅れるか、無視されるかもしれない。だが意外にも切り返しは早かった。

「もしかしてカマかけられてる？」

「みんなその話好きだよね」

探りを入れられていると勘違いしたようだ。そしてやはり、望月は彼氏がいることを否定してはこない。

真剣さを伝えるために長文を送ってみる。

「まず根本的なところから。修学旅行の二日目の夜。ホテル蜜蝋の月に私たちは泊まっていた。七時から七時半まで日記を書く時間があてがわれ、殆どの生徒が部屋にいた。彩音は七時十五分に連絡を受け取り、スマホを置いて部屋を出る。エレベーターに乗って屋上へ行き、ストラップを持って部屋に戻ってきたのは七時二十五分だった。これは合ってるよね」

望月はステッカーで返信してきた。猫が抱腹絶倒するイラストは、肯定と捉えるべきか、それとも大真面目に語る宇佐美を嘲笑っているのか。

「アーカイブを見た限り、ストラップが話題に出たのは彩音が戻ってきてからだった。彩音は会った人からそのストラップを受け取ったんだ」

またはぐらかされると思いきや、「そうだよ、会ったときに貰ったの」と認めてしまった。俺は肩透かしをくらいつつも話を続ける。

「彩音が部屋を出ていた十分間、他にも部屋を出ていた人がいた。藤代、榊原、三条、佐川先生の四人。いずれも単独で行動し、アリバイのない時間がある。この四人の中に彼氏はいらぬ。どうかな彩音？」

望月の返答はない。沈黙は肯定と受け取った。

「でも、ホテルのホームページを見るとある事実が浮かんでくる。通常階段は八階までで屋上に通じていない。非常階段を宿泊客は使えない。残るエレベーターは彩音以外乗っていない。彩音が彼氏と密会していた時間、屋上は密室になってたんだ」

一見すると、彼女は屋上という密室にいるように思える。けれどそれでは説明がつかない。密会の時間に、密室は破られていなくてはならないのだ。

頭に三条の「密会などなかった」説が蘇る。あのときは論理性を失っためちゃくちゃな推理と捉えたが、発想自体は正解だった。全ては逆だった。上にいると思われた彼女は、実は下にいたのだ。

「エレベーター、電車のドアみたいになってて、上半分しか見通せない。もししやがみ込んだとしたら、だれも乗ってないように見えると思わない？」

望月の反応は早かった。

「実は屋上にいませんでしたってこと？ 証拠はないじゃん」

問い詰められると証拠を求めるのは犯人のお約束だが、望月がそんな反応をするとは意外だった。

「彩音を乗せて屋上に向かったエレベーターが、すぐに一階まで降りていった。最初は自動で一階に戻るシステムなんだと思ったけど、そうじゃない。あれって数分から数十分で基準階に戻るんだよね。数秒で帰るはずがない。それこそ、ボタンを押さない限りは」

「彩音はエレベーターに乗って堂々と屋上を去った。そして、降りた一階で彼氏と会ったんだよね」

またしても望月は黙する。都合の悪い問いかけには徹底して応じないつもりか。ならば良いだろう。俺は畳み掛ける。

「彩音が一階にいたのなら、通常階段から会いに行ける。密会相手は、通常階段を使った」「それともう一つ。彩音は彼氏から通知で呼び出された。密会相手は、通信手段を持っている」

次が最後。俺は特段慎重に入力する。

「三つ目はストラップ。映像ではたいやきって言われていたけど、違うよね」

「あれは開榊。木魚の原型になった、って話、彩音なら知ってるよね？」

開榊。三大禅宗のひとつである黄檗宗、その総本山の萬福寺を創建した隠元和尚が、中国から持ち込んだ鳴り物だ。

最初に班行動で萬福寺に訪れたいと言いつ出したのは望月である。彼女が開榊を知らぬはずがない。そして、あの開榊ストラップは萬福寺でのみ販売されている商品だった。彼女は班行動のルートが変更になったことで、密会相手から萬福寺のお土産を受け取った、と俺は見ている。

「彩音は密会相手から、萬福寺限定のストラップを貰った。密会相手は、萬福寺に訪れている」

すべての条件は出揃った。望月の彼氏は、通常階段を使い、通信手段を持っていて、萬福寺に訪れた人物。

「まず藤代。藤代は修学旅行のルールを守って、スマホを持ってこなかったよね。連絡手段がない」

軽薄そうに見えて妙なところで真面目だった藤代は、手持ち無沙汰を嘆いていた。残り三人。

「次に、榊原。スマホは持ってきていたけど、通常階段を使っていない」

宇佐美と付き合っていた榊原は、エレベーターホールを通っておらず、通常階段を使えなかった。残りは二人。

「そして最後、佐川先生はスマホと通常階段を使っていた。でも佐川先生は萬福寺に行っていない」

厳しさの内に優しさを秘めた、望月からも好かれる佐川先生が候補から外れる。

最後の人物は、スマホを持ち、通常階段を使い、班行動で萬福寺に赴いた。六階の自販機に、飲み物を買うに行くといって席を立ち、五階にいる佐川先生に見つからず帰ってきた。

大して急いだ様子でもないにもかかわらず、ぬるそうなドリンクが激しく泡を吹いたのは、今に思うと、あらかじめ買っておいたもので、班行動のときからずっと持っていたためではないだろうか。

望月に思いを馳せる。突然推理を聞かされた彼女は今、何を考えているのだろう。アイドルのこと、それとも学校のこと。

やはり彼氏である、三条のことだろうか。